昭和50～60年代　平成元～10年　平成10年～30年　令和

伊予柑が一時代を築く

需要低下とともに八朔、ﾈｰﾌﾞﾙも昭和50年代後半より減少。

伊予柑は急増し全国生産量20万tまで増え一時代を築いた。

ｵﾚﾝｼﾞの輸入自由化

昭和63年にオレンジの輸入自由化が決定し、「かんきつ園地再編対策」が実施された3年間で、県内柑橘栽培面積は昭和63年の26,519haから平成3年には22,304haと減少。

生産調整による量から質への転換

生産調整により栽培面積が減少。

少量多品目化・越冬中晩柑栽培への取り組みが始まる。

不知火の出現

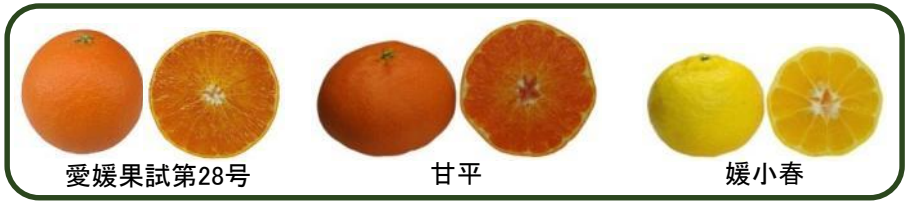
不知火は高糖度・大玉でじょうのうが薄いうえ、種子もなく食べやすい中晩柑として急増。

果梗部にﾃﾞｺ(ﾈｯｸ)があることが特徴であり、消費者に対しインパクトが強。

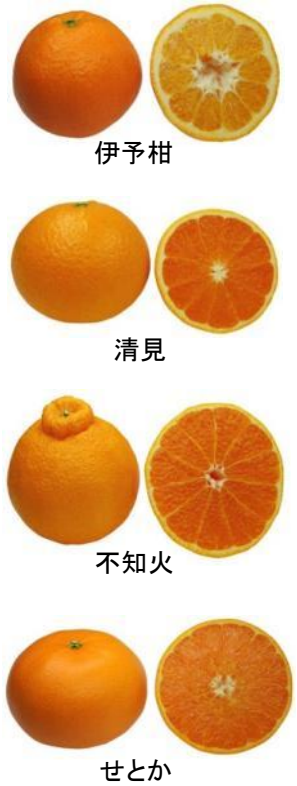
優秀な中晩柑が次々誕生

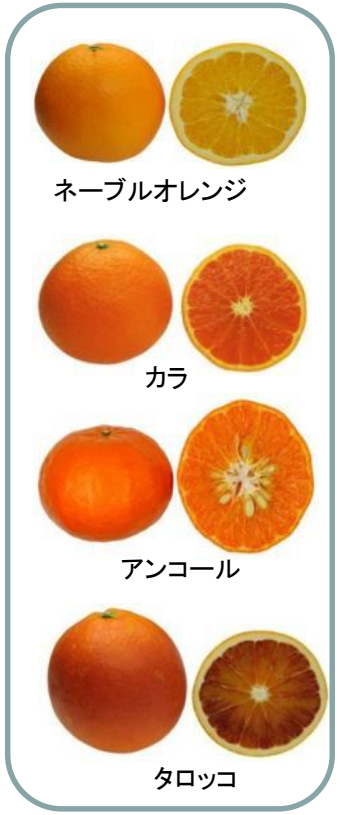
せとか（平成10年登録：国）、愛媛果試第28号（紅まどんな）（平成17年登録：愛媛県）、甘平（平成19年登録：愛媛県）などが次々と誕生。

食味に加え食感が重要視され始める。



愛媛オリジナル品種





海外からの導入品種

柑橘の周年供給体制へ

温州ミカン生産量が100万tを切る時代に。

消費形態の多様化　中晩柑の多品種化（不知火、ポンカン、せとか、河内晩柑、清見、愛媛果試第28号、甘平、カラ、タロッコ他）。

オリジナル品種の拡大等による儲かる果樹農業の推進

愛媛果試第48 号（紅プリンセス）（令和4年登録：愛媛県）が誕生。紅まどんなと甘平に続く本県オリジナル品種の第3の矢として早期の生産拡大を目指す。これらオリジナル3品種で、11 月から4月までの約5か月間のリレー出荷が可能となることから、愛媛かんきつをリードする看板商材としてブランド力の強化に取り組む。

品種で築く、愛媛の周年供給！

愛媛県 農林水産研究所 果樹研究センター
みかん研究所